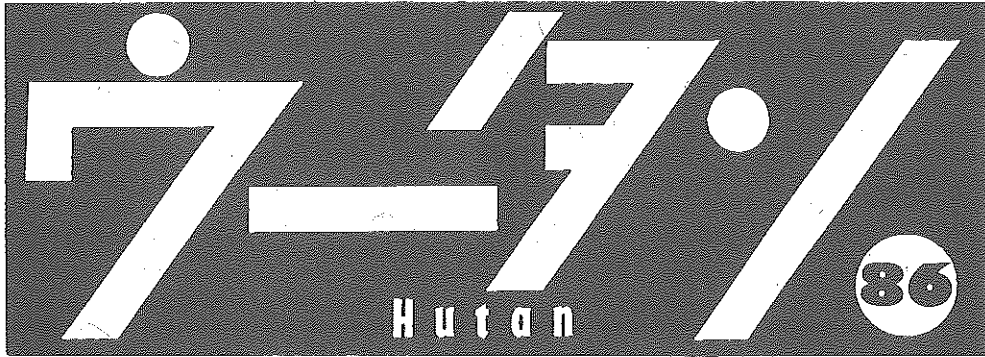


Save The Tropical Forests



森の通信

2008.1.29



▲ 違法伐採停止したタンジョン・アフィン公園（インドネシア）のスグアイ・ブル・ワール

CONTENTS

- people ⑤ トグ・マヌルマン …… 3P
- ラミンキャンペーン …… 4P
- COP 13 Bali会議報告 …… 7P
- 11・8 「インドネシアの森林保全を」 …… 10P
- 世界の森林ニュース …… 13P
- 朝日新聞「地球異変」取材同行記
中村彩乃 …… 14P
- 新聞記事 …… 19P
- ホルネオ・植林エコツアー下見旅
大平浩子 …… 20P

2008年、20周年目で新たな取組みを!!

【密輸材ラミン停止宣言】を行い安心。だが12月バリ会議直前で問題が起きた。現在の輸入企業の仕入れ状況を考えれば、ラミンが全世界で完全停止に近づくのは2年かかるだろう。これまでより数段やさしい。「木材マフィア」が関わっていたが、彼らも大変だ。

停止宣言できた要因は、①国際キャンペーンとインドネシア政府の違法伐採の取組みが進み効果が出てきた。②2007年4月、日本の500社以上の企業が停止し、数社のみが販売継続で、ほぼ停止の状態になる。一時期に最大輸入国だった日本で2004年末200社が停止を決めたことが大きい。③マレーシア一部の企業も停止企業が現れたし、シンガポールのラミン輸入企業は8割停止。④EUも2007年4月にラミンの輸入を中断（the Star誌）。⑤インドネシア・タンジュンプレタイン国立公園では、2007年の中村さんの開取りで「ラミン取引したら逮捕」と。他の国立公園も2006年秋以降大半が販売停止。⑥サラワク州 Sematan を除き、陸路の主経路等でインドネシアの違法の流入材が激減。約100箇所の違法材流通ルートが停止した。

11月、リアウ、西パプアでマフィアを逮捕していたもの、無罪放免された。密輸の逆行の可能性もある。この12月、バリ会議でインドネシア政府に申入れをした。悪い者に明らかな裁きが必要。バリ会議は【生物多様性】問題や【森林保全を含む温暖化防止会議】で重要なものだったが、日本政府は各国に比べて認識が低かった。何とかバリ会議が成功したことを喜びたい。

ウータンは2008年、ウリンのキャンペーン、温暖化防止・違法材監視ツアー等を行いたい。ちょうど20周年だから、新企画にも取り組みたい。

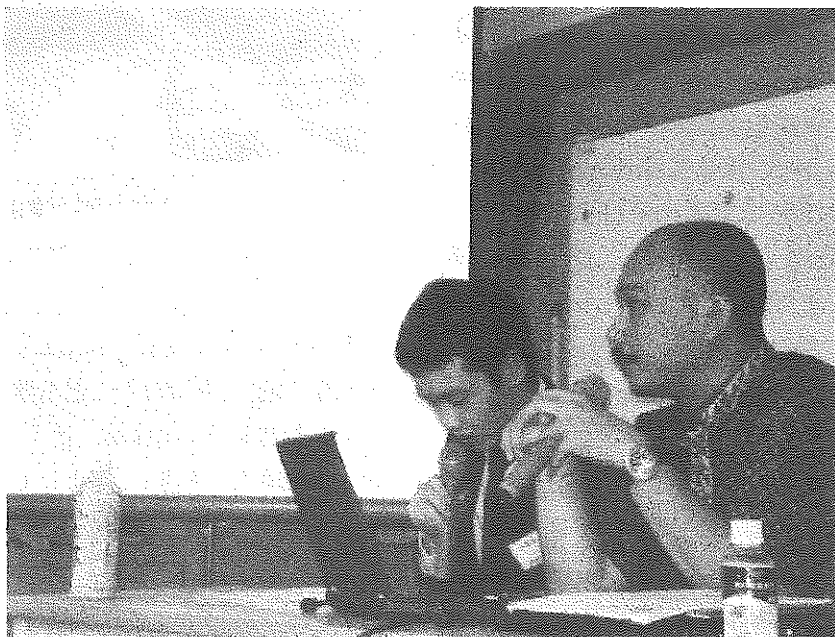
(西岡)

【ウータン活動報告】

- 2007・9・15 ウータン、関西NGO協議会で「ICAにインドネシア等で「温暖化防止策取組み」、
「違法材問題」、「原生植生の再生計画」の実施検討を依頼。
- 9・22 関西NGO大学で報告、カリマンタン再生計画等をアイアイネットと話す。
- 9・29 報告書『The End of Illegal Ramin Trade』作成開始。
- 10・6 ウータン、ラミン調査会合同会議、絶滅危惧種ウリン・キャンペーン開始決定。
- 10・9 都道府県等へ依頼の『違法材の使用停止及び原生林材の使用削減の施策について』の
質問状の回答率約5割。
- 10・9 「通信ウータン85号」発行。
- 10・22 インドネシア・カリマンタン報告会を大阪府環境情報プラザで実施。
- 10・30 ウータン、ラミン調査会、FoEJapan、Telapak、Forest Watch Indonesiaでウリン材
使用停止依頼キャンペーン148社に送付。
- 11・5 ウータン、Telapak/EIA、ラミン調査会、FoEJapanで『The End of Illegal Ramin Trade』、
ITTO、バリ会議用等の報告書完成。
- 11・7～10 西岡、相乗、中村、篠宮、ITTO（国際熱帯木材機関）理事会へ参加。
- 11・8 ウータン、FoEJapan共催の東京集会、ゲストForest Watch ボブ事務局長、Yayasan Titian
代表ダルマワン氏による「インドネシアの森林破壊、違法伐採アブラヤシ開発」をPR。
- 11・8 ウリン使用企業と話し合い、企業連合会、即日停止決断。
- 11・21 ウリン停止回答25社に。
- 12・3～15 中村、西岡、バリ会議、カリマンタン調査へ。

People⑤ Save the World's Forests!

森林破壊と闘う! Forest Watch Indonesia新事務局長・ボブ氏



忙しい合間をぬって日本でインドネシアの森林伐採を講演してくれたボブ氏。新事務局長になり、大変だと。ただし「ボスは4名いてる。元事務局長で、現インドネシア林業大臣アドバイザーTogu Manurung(トグ・マヌルン・People①)氏、そして現体制を資金的に支える2人です。」もう一人は誰かと聞くと「うちの母ちゃんです」と。

いつもニコニコして、ストレスがないのではと聞くと、「やっぱり我がインドネシアの森林が減り続けていること」と。連れ合いはTelapakで頑張っている。

(Photo/篠宮// インタビュー/西岡) -11月8日東京集会で

《やれば出来る！ラミン材・ 違法材停止⑬》国際キャンペーン(13)

【停止宣言】逸話/Final 事務局長・西岡良夫

—How to can we stop 違法材(全て明かない)!!

【密輸材ラミン発見！—政府と協力が成功へ】

1999年11月、インドネシアNGOのTelapakとシンガポールからの密輸ラミンを岸和田港で見つけて約8年で、停止宣言にこぎつけた。

その時、感で調べた和歌山県N沢木材は、『ラミンならお任せ』とHP記載し、ラミンのみ販売していた。まだ販売しているらしいが、これ以上締め付けたらXの恐れがあり、放置する。

シンガポールGeneral Lumber Products等から輸入しているが、今年ラミン材をはじめインドネシア政府が大掛かりな違法材取締りを始めた今後困難だ。国際取引は1-2年だろう。

最初に発見した時、社長のN沢三郎氏と電話でインドネシア産を確認した。当時N沢木材は「ネシアだ。年8-12千m3輸入」と言う。

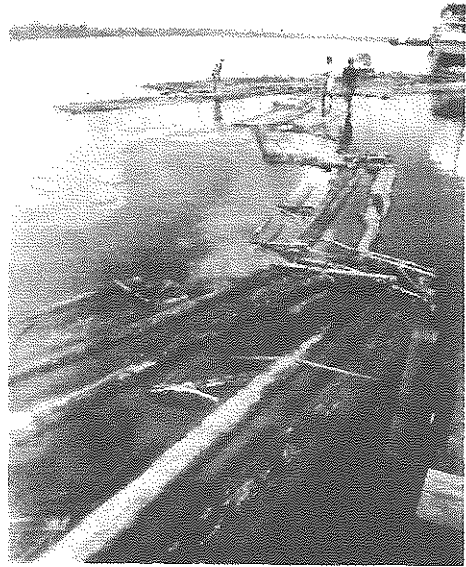
親戚がN沢木材近くに住んでいたので、情報が次々と入り、口外していない各倉庫を何度も確認。ラミン調査会も聴取りしてきてくれた。

ラミン材調査は同調査会と日本政府のお陰。

2003年秋、違法伐採でスマトラ島の大惨事が起き、ITTO(国際熱帯木材機関)理事会で日本政府と協力関係を持てたのが成功への道となった。

【環境に優しい企業の協力、そして企業申入れ】

仕事で子どもたちが箒を振り回していた材がラミンだった。ラミン調査会のメンバー笠原、米沢さんらはそれを見ていた。「ラミンがチャンバラ材にされる」と奥村代表らが調査した。



タンジュンブテイン国立公園で違法伐採ラミン材
…今はKumai港の木材工場無 (by Telapak)

箒は堺市のM商店からだった。M商店はとても協力的で、違法材のことも考慮してくれた。大手の製造元が山崎産業、テラモト。これらの企業が環境面を考慮し、停止してくれたことが、『ラミン停止宣言』に繋がった日本での2番目の要因だろう。

3番目がFoEJapanのメンバーがインドネシアから持ち帰った資料だろう。写真の額縁にラミンが大量に使用されていたのだ。資料は暗号のようなもので、調べるのに2ヶ月かかった。商品コードを書いたもの、企業名を記したものが、製品名を記したもの、いろいろだから。最初は大手のメーカーが「停止回答」を寄こさないのので、止む無く資料を企業に送りつけたら、雪崩を売って【ラミン材使用停止】の回答がきた。

4番目の成功理由は、私たちの師匠、猪俣さんからいろんな教を頂いた。そしてコタツ、ベビーベッド業界をしらみつぶしに探し、何度も繰り返し依頼したから。そこのなかですばらしい企業と知り合えた。キンタロー、大丸等だ。【停止】をHPで知らせてくれた多くの企業。

【生産国 NGOs と国際協力が成功の鍵】

何よりも成功した鍵は、インドネシア NGOs との連携だった。特に Telapak とは共同調査を実施した。そしてインドネシア各地の NGOs から違法材流通ルートの情報いただいた。今年11月、ITTO、AFP（アジア森林パートナーシップ）の期間に招聘したダルマワン氏もその一人。シンガポールでは半日だけ EIA とも情報交換と共同調査もした。これが5番目の要因。

大手企業の伊藤忠商事、三井物産などラミン材停止してくれたのは、マレーシアのウータンの仲間からの英文メールにもよる。

多くの交流、情報交換できたことが成功に繋がった。情報をどんどん仕入れ、HP を閉じて情報を出さないようにした事が6番目の要因。

ウータンの事務所が大阪にあったことも大きい。東京なら大々的な違法材停止キャンペーンを張れなかった。停止依頼する場合、関西では材木が「シマ荒らし」にならないからだ。

【違法性認知をしつこく知らせ、停止依頼を】

個人的なことだが、本格的なキャンペーンを開始した2004年は、へろへろになった。「停止」「検討する」と回答のない企業には、何度も何度も繰り返して、手紙、Fax、電話で依頼した。1週に2度以上も停止依頼を求めた時もある。企業はそれでラミン材使用の違法性を認識してくれた。

混乱し始めた企業は「2チャンネル」のようなどころのHPへ投稿していた。「次々Faxが送られ、社内で責任を問われる」と。

そんなことをキャッチしたので、違法取引や密輸を続ける責任者や企業にもっと告知しようと、更なる要望をしたことが7番目の成功要因。

【計画・目標を立案、成功へ事例を多く検討】

8番目。2004年4月の本格的キャンペーンで、

目標を定め、秋のワシントン条約会議までに集中しようと。例えば「2004年夏に50社、9月末に75社、同年内に100社停止目標」と。

9番目、仕入れ企業を掴む。例はDIY店。

ホームセンターは聞き取りで、ポロポロ仕入れ企業名を言ってくれた。まずラミンを大量に置いているかを聞き、「大量購入するが、貴社の値段が高い。どこから仕入れているのか。高すぎは買わない。他社で大量に買う」と伝える。再連絡で、大半のホームセンターは簡単に喋った。

10番目、仕入れ量を掴む。

【調査の成功は詳細データ収集、足で廻る事】

なかなか停止を決めない企業の代表者の自宅や倉庫に赴いた。2004年5月のウータン・ラミン調査会合同会議で、ラミン調査会の川上さんが「在庫量確認が重要」と提案し、企業に在庫量確認を依頼する。海外から多く輸入しているような企業には直接電話したり、聞き取りした。それで輸入ラミン量が判ってきた。現場も行った。

面白かったのが伊藤忠建材。伊藤忠商事の取引の一部も電話で聞き取れた。電話を【保】にしないというミス。慌てた証拠か。

伊藤忠関連意が仕入れていたSが、2003年に凡そ8000m³、その他ラミンを中心に輸入していない企業は250-6000m³、それで2003年の輸入量が7万m³と推測した。全ての把握は困難。なぜならラミンは他4樹種と混合輸入統計され、N沢のように違う樹種と申告し輸入の場合は把握困難。だが2004年末に主な輸入企業の半分くらいがラミンの輸入を決めてくれた。

2004年から税関に行く。2005年秋、Telapakも同行した横浜税関では「ラミンの輸入は月に2-3回になった。2004年に比べると1/10以下。ただし樹種を違う樹種として輸入している場合、我々は判明できない。横浜税関管内でスペシャリストは1名だけ」とM浦氏。ここが問題。

【まず環境問題に優れる企業に申入れを！】

2005年より劇的に輸入量が激減し、2005年から本格的に国際調査に動きだす。インドネシア NGO との情報交換も有効だった。

2004年10月からの国際キャンペーンの実施。これは、日本国内のラミン材停止の流れができる目処がたったからだ。ワシントン条約会議が開かれている時のほうが影響力が出ると考えた。

10月3日、1社目はマレーシア・サバ州のコタキナバルの日系企業。代表者の K 氏は突然の申し出でもあってくれ、「ラミンが違法取引されていたとは、」と知らなかったことだが、その場で【停止】を決めてくれた。

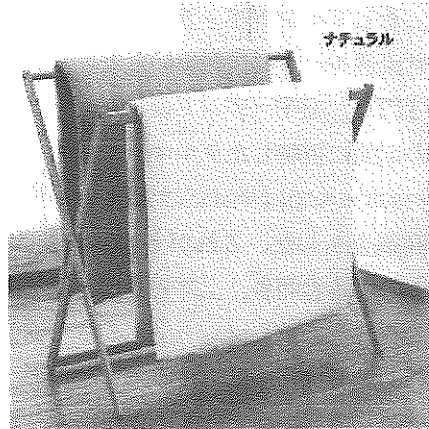
翌日、マレーシアのメンバーとクアンタン市の企業を訪問。その後、2005年以降マレーシア企業を60社以上訪問したが、直ぐに「停止も検討する」という企業はごく稀であった。未だにマレーシアの企業は、違法材ラミンを扱うところも多い。

それに比べ、シンガポールのラミン輸入企業は、一度目の話合いの際に【ラミン停止】とならなかつても、資料を渡し、再度、後日訪問すれば【停止した】、「再度考慮す」という企業が多く、【停止】企業が増えた。それで、マレーシア企業よりシンガポール企業を先に【違法材ラミン材停止】を進めようとした。結果、輸出入の8割のシンガポール企業が停止。これは環境問題に敏感な企業ほどお願いしたら【停止してもらえる】と経過で判っていたから。国際的な状況を判断できるデータ入手が出来るためだろう。

インドネシアのラミン輸出入企業も2006年秋から訪問したが、インドネシア政府が違法材停止政策を実施してきだしたので、【停止済】企業や【話し合えば停止】の企業が増えた。

その後もマレーシアの企業を訪問するが、お茶を濁す企業が多い。このような場合、外圧と政府の政策が働かねば【転換】しないだろう。

国の政策が如何になっているか、本当に実施する気があるかどうかだ。ウータンは国を信じたことが成功の大きな鍵となったと思う。



物干し竿もラミン材・2006年停止の千趣会

【違法材のインドネシアでの輸出入の現状】

インドネシアからマレーシア、シンガポールへの違法材ルートは2007年5月までに120箇所が、Telapak、ELAの活動、私たちの働きかけ、インドネシア政府の取締りで、激減した。

今は西カリマンタンから Sematan への海上ルート、シンガポールの対岸パタム島へのルート、その他スマトラ、リアウ島の海路から半島マレーシアへ10箇所以上。陸路は西カリマンタンから3箇所以上、東カリマンタンからサバ州へ5箇所程で、約100箇所の違法材搬出ルートが消滅。とはいえ今でも、中カリマンタンの Lamandau 保護区、パンカラヤ市、Sampit 市郊外の国立公園、森林保護区や東カリマンタン、スマトラ島等で違法伐採が続いている。

ラミン材取引は大半停止したが、2006年3月にインドネシア政府が輸出停止を決めたウリン(ボルネオ鉄木)の木材市場での取引は今も続いている。オランウータンが巣とする樹だが、。

今年から【ウリン停止キャンペーン】だ！2008年で20年目。新たな取組みをしていきたい。(「やれば出来る【ラミンキャンペーン】終」)

2007年12月、COP13 温暖化防止 Bali 会議合意—①森林問題から

—放置すればスマトラ等の泥炭湿地は、温暖化、火災、海面上昇で島の部分が消滅—

【Report】

事務局長・西岡良夫

12月3日から14日の温暖化締結国会議(COP13)がインドネシア・バリで始まった。

今回注目は、①2008-12年でのCO₂排出削減等を決めること、②ホスト国インドネシアで一番問題になっている森林破壊・火災・アブラヤシ開発でCO₂排出量が2030年までにピークになり、それに対する処置等だ。

ところが日本政府は、経団連の圧力から削減へのRoad Map(削減過程)を決めておらず、環境省等は森林破壊への対策案も持っていない。お先真っ暗で、初日から破壊大賞1位をプレゼントされる始末。「ああア」だ。

12月8日『Forest Day』オープニングはユドヨノ大統領の予定が変更し、カバン林業相。

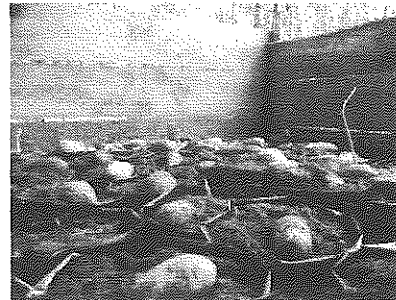
彼は「森林減少を食い止めねばならない。

1つは違法伐採と違法取引。これはかなり成果を挙げた。そして火災は現在、政府が総力を上げている。3つ目がアブラヤシなどの開発が計画的にされてこなかったこと。排出量がこれらで、インドネシアはCO₂排出量が世界3位になっている。森林破壊からCO₂排出はカウントされていない点も京都議定書に記載している見直し条項で改めるべきだ。4つ目に、植林を2009年目処に5億本実施。森林破壊を食い止める最大の努力をするので、『Road Map』も作成し世界に森林破壊停止を、温暖化防止を呼びかけたい」と挨拶した。

12月9日、Wetland Dayでは、驚いたことに中カリマンタン政府からの報告。「1957年よりCO₂排出量が急激に増えだした。



Friends of National Parks Foundation のメンバーが2006年タンジュン・プティン国立公園で鎮火の活動—同公園も1ヶ月燃える



上) 焼けたウリンの種・・・死んでなかった
下) 焼けたウリンから3ヵ月後若芽が出る



大原因は、①違法な伐採、②無計画に無秩序に出来たアブラヤシなどの開発、③大火だ。特に Mega ライスプロジェクトが壊れた後、大火が最大の原因。この原因の元は、無秩序な商業伐採、違法伐採。持続可能な社会にするため知識、技術、資金等が求められている。今後、①伝統的なルールを用い、②Peat Land (泥炭湿地) に適応する社会作り、③エコシステムの保全、生物多様性のある暮らし・生態系、④継続した炭素・窒素等吸収量の調査、⑤問題を PR である」と。急変に驚きだ。

また Wetland Inter、その他のNGOs から「温暖化が進めばスマトラ島、リアウ島は火災・違法伐採、水面上昇等で泥炭湿地林が燃え、底にある泥炭が燃え、地盤が沈下して、島の一部が消える恐れがある。直ちに泥炭湿地の保護と温暖化防止を」と報告した。

12月13日、60カ国の先進国を含む大臣・大臣級の多くは、「森林劣化・保全問題について2012年からの第2期間からCO2削減課題に盛り込む課題」と official の発言があり、最終日に盛り込まれ合意された。

*ノルウェー・Jen Stoltenberg 首相は「CDM (クリーン開発メカニズム) によるCO2吸収を支持する。途上国の森林破壊に影響するCO2発生を防ぐには500Millionドル必要と報告され、我々も努力したい。」

*カナダは「2050年のCO2半減目標に同意する。森林問題関連を含む新たな合意が2012年からの課題の1つとすべきだ。」

*スウェーデンは『EU2020年へコミットメント』は、アメリカの参加を賛同し、同国が削減へのRoad Mapを作るよう求める。緊急課題として、森林保全によるCo2削減を受け入れる。」

*カメルーンは、「今後2年で、バリ会議のRoad Mapは森林保全、森林破壊、土地利用形態にパイロット計画を作成支持する。」
*ブルネイは、『heart of Borneo (インドネシア・マレーシア国境でのアブラヤシ開発・森林破壊計画) に対し、森林保全しよう (つまり計画中止) 強く求める。」

多くの国が、土地利用形態によりCO2を大量に排出していることを認めた。これがバリ会議での大きな課題の1つといわれたが、森林保全でどれだけCO2排出削減できるかは今後の調査いかんにもかかる。

温暖化防止会議は、森林破壊によるCO2排出削減を1つのKeyとしていた。インドネシアの泥炭湿地破壊によるCO2排出量は今までカウントされず、量は火災によるものが14億トン、伐採・アブラヤシ開発による土壌変化でCO2排出量が6億トン、計20億トン。これは世界3位の排出量となる。バリ会議で森林破壊を防ぎ、温暖化防止が計画された。

ウータンはこの機会に直接カバン林業大臣と話し、「①全世界がRoad Map作成すること、②違法伐採停止を全世界にPR、③アブラヤシ開発等の停止」をPR、依頼した。

2007年12月15日、1日遅れ手かなり揉めたが、アメリカを含む全世界はバリ会議(バリRoad Map)を満場一致で可決した。ただ第2期間の40%ほどの削減目標を決議できなかったが、次回USブッシュ政権が変わるので、温暖化防止へ大きく進むだろう。

今回、森林破壊・劣化問題を含め温暖化防止の決議は、大きなStepになるだろう。

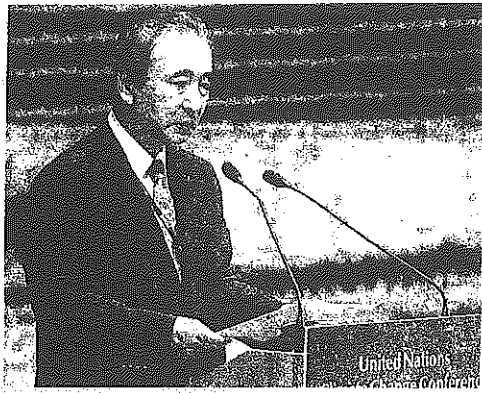
(次回②へつづく)

特定樹木狙った伐採でまばら

「森林劣化」防止も課題

COP13

2013年7月12日



【又サドゥア（インドネシア・バリ島）】矢野英基（須藤大輔）国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP13）は、途上国で新たな森林破壊防止策に乗り出すことで合意した。森が農地などに変わる「森林減少」と、違法伐採で本来の森の姿

【又サドゥア（インドネシア・バリ島）】矢野英基（須藤大輔）国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP13）は、途上国で新たな森林破壊防止策に乗り出すことで合意した。森が農地などに変わる「森林減少」と、違法伐採で本来の森の姿

が失われる「森林劣化」が対象。13年以降の京都議定書後の次期枠組みで防止策をどう位置づけるか、12日から始まった閣僚級会合で詰める。これまで先進国の温室効果ガス削減手法として、途上国での植林などが認められていたが、森林の減少や劣化を止める手立はなかった。インドネシアやブラジルなどでは、開発などによる森林減少のほか、森の形は残っているも機能が損なわれる森林劣化が起きている。天然林をアブラヤシの畑にしたり、特定の樹種を違法伐採したりして樹木の密度が低くなるのが原因だ。

閣僚級会合で演説する橋下環境相 12日、林被行撮影

この問題を話し合ってきた補助機関の案は、森林減少とともに「劣化」によって温室効果ガスが排出される」と認定。緊急に行動する必要性を強調し、効果を確認する先行事業の実施を含めて対応するよう求めた。ただ、厳密な定義は難しく、どう劣化を把握するかは技術的な課題として残った。

インドネシアは当初、対策が必要な分野として減少と劣化とともに「森林保全」を提案。しかし、森林保全が十分に進んでいないとされるブラジルなどが反対。結局、保全は見送られた。

一方、次期枠組みづくりの行程表（パリ・ロードマップ）を巡って12日夜、議長国インドネシアが主要約40カ国を集めた非公式閣僚会合で対応を協議。13日に再び事務レベル会合を開き、議論を詰めることになった。

COP13議長合意案要旨（一面参照）

【前文】

締約国会議は、「温室効果ガス排出削減の遅れは、より深刻な被害を招く」とした国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第4次評価報告書にちなみ、大幅削減が必要だと認める

【本文】

COP15で合意するために、長期的な共同行動を通して完全に実効性のある条約を実施できるような包括的なプロセスの開始を決断し、以下を検討する

進捗による、温室効果ガス排出の数量的な限定や削減目標を含む、計測と報告、検証が可能な国別の抑制行動や関与の開発途上国による、計測と報告、検証が可能な抑制行動の森林伐採と森林劣化による排出を削減するための政策や防止奨励策適用、被害軽減の緊急

行動を支援する国際のな協力
技術 途上国への技術移転を拡大するための障壁を取り除く手法の強化
▼環境にやさしい技術の普及加速
▼革新的技術の研究開発の協力
資金 途上国に対する資金についての利用やすさの改善
▼途上国が排出抑制や適応の行動を起すための誘導策
条約の補助機関として「長期的な共同行動のための作業部会」を新設。09年までに交渉を終え、その結果をCOP15に報告する

第1回会合（08年3月か4月）、第2回（6月）、第3回（8月か9月）、第4回（12月）



COP13で、最終日の深夜になっても議事が再開されず、疲れた様子の各国代表団 15日午前1時30分、インドネシア・バリ島で、林被行撮影

11-8 「インドネシアの森林保全を」ウータン & FoE Japan 共催集会

2007年11月8日にJICA地球ひろばにて、森林セミナー「知ってください！インドネシアの違法伐採とアブラヤシ開発～地球温暖化に影響する森林減少を考える～」を開催しました。

今回は、インドネシアから Forest Watch Indonesia 事務局長のクリスチャン・プルバ氏と Yayasan Titian 代表のダルマワン・リスワント氏を迎えて、インドネシア森林の最新情報を紹介しました。

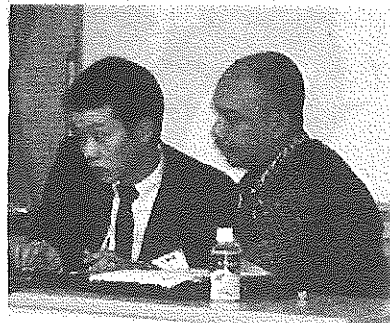


プルバ氏は、「The State of the Forest in Indonesia - Damages and Future Challenge Changes -」と題したプレゼンテーションを行い、まずインドネシアの世界一の森林減少率を紹介しました。一例として、1996年以來、毎年約200万haもの森林が減少しており、換算すると一分間に東京ドーム2.8個分になります。また最近では、2000年から2004年までの間に、森林減少率は毎年280万haにまで上昇しているとも言われています。衛星写真によって、インドネシアの森林減少を目で見て、確認することもできました。

その森林減少の理由として、プルバ氏はいくつか挙げ、その中に違法伐採や森林火災などがあります。「政治的な腐敗などにも起因する法の不整備が、森林火災を引き起こしたり、森林のオイルプランテーションへの過度の転換を引き起こしている」とも述べました。

「違法伐採は、木材の需給量データの差異から、確実に起こっており、政府歳入の減少、森林地域に住む先住民の社会的な利益損失、またCO2などの温室効果ガス排出増に影響を与えている」と主張しました。

そして、このようなインドネシアで起こっている過度に進む森林減少問題を解決するために、取り組むべき課題が示されました。インドネシア木材産業の合理化によって木材需給のバランスを調整することや、違法伐採に関与している財界有力者などを罰するための法整備が、供給側の取り組みとして重要だと述べました。また需要側としては、持続的な森林経営から生産された合法材のみを消費することが、不可欠だと述べました。



プルバ氏(右)と通訳のFoE江原さん(左)

また最後に、森林減少の地球温暖化への影響について、説明しました。世界において地球温暖化の大きな原因は、化石燃料の燃焼ですが、インドネシアにおいてはそうではありません。

ブルバ氏は、「森林火災や森林減少は、インドネシアにおいて最大の温室効果ガス排出源となる」ということを、一般の人々にもっと認知してもらう必要があると指摘しました。

ダルマワン・リスワント氏は、「Illegal Logging Di Kalimantan Barat」と題して、西カリマンタンにおける違法伐採を、いくつかの小地域に分けて発表しました。

製材業者、流通業者は、インドネシア産の木材をマレーシア産の木材に見せかけるために、様々な方法を用いています。ダルマワン氏は、その流通ルート写真を写真、地図などでわかりやすく説明しました。例えば、ヘンキン氏という製材業における有力者が、偽装の合法林産物証明書、税関証明書、輸出通知書などを用いて、違法伐採材を合法材として輸出していることを、紹介しました。さらに、流通方法の例において、普通自動二輪車による製材の運搬などが、写真を用いて紹介されました。

違法伐採の要因として、法の不整備、腐敗した政治家や官僚制度などを挙げました。その例において、カプアス・フル県の国境付近における違法伐採の手口の変化が言及されました。カプアス・フル県の国境付近では、1999年から2002年まで違法伐採は、主に悪徳資本家から政府関係者へと働きかけて伐採事業権を取得し、木材を合法材に偽装していましたが、現在では、政府の実施する森林関連プロジェクトにも悪徳資本家が関与し、地方住民などへ働きかけるケースもあり、違法伐採材流通ルートが増加しています。



ダルマワン氏(右)と通訳のウータン中村さん(左)

そして、最後に、それらの違法伐採要因が、相互に複雑に絡みあっていることが示され、解決には困難を極めていることが示されました。

プレゼンテーション後の質疑応答とディスカッションでは、一般の方から、「より具体的な違法伐採解決方法を示してほしい」という提案がなされるなど、違法伐採問題に大きな関心を示す聞き手も見られました。

2007年12月開催のCOP13には、FoE Japanとウータン・森と生活を考える会も参加します。

【12月・温暖化防止会議合意！森林対策も】

9月24日、インドネシア政府は「CO2を吸収の熱帯林に違法材対策と森林保護拡大」と国連で表明。10月22日、COP13温暖化締結国会議ホスト国インドネシアは、森林破壊へ歯止めのための【基金】と「市場取引メカニズム」創設をブラジル等、途上国で提案と。同メカニズムで森林防止をCO2排出量取引対象とし、先進国が途上国の業者に資金提供して伐採を止めさせると排出量枠を得られる案。日本は、世銀とIMF(国際通貨基金)の合同開発委で3年1000万ドルを拠出と表明。

12月バリ会議。第2期間の削減目標を削る議長修正案を全世界が合意。(資料:各新聞)

【インドネシア、違法伐採摘発も無罪に】

9月末からインドネシアで一番問題視されるスマトラ島リアウで最大規模の違法伐採摘発がされる。だが10月中旬、木材マフィア王は裁判で無罪に。放置すれば密輸再発の拡大の可能もあり、12月COP13で、インドネシア政府に問題と伝える。(朝日新聞、Telapak)

【マレーシア、法改正で所有者が違法を証明】

丸太輸出の違法をめぐり、今まで取締当局が違法性の証明をしていたが、数ヶ月以内にされる国家森林法改定では、丸太所有者がその丸太の違法・合法性の証明を負う。嫌疑をかけられた者は、それが合法か証明せねばならない。ラザク副首相は「新法は違法材への抑止力になるだろう」と。(スター紙、9・18)

【ウリン材停止キャンペーン、進みだす】

10月末より始めた絶滅危惧種・インドネシア政府輸出停止材・ウリンを日本企業の多くが使用につき共同キャンペーンをウータン、ラミン調査会、FoEJapan、Telapakなどが実施。147社停止依頼に25社、1工業組合連合体(計17%)が「停止・使用もうない」と11月21日までに回答。(資料:ウータン通信前号)

【IPCC、温暖化対策30年間努力必要と】

11月16日、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)は「海面の上昇、生物種の絶滅、高山・極地の融解など非常な悪影響がある。今後20-30年間の温暖化防止の努力が危機を回避できる要因」と報告。

11月24-25日の気候ネット集会で、「10年で温暖化対策に4回政策変更したがCO2状況は変わらず。経団連等が自主計画のため削減の努力が少ない。」CANのJモーガン氏は「今後10-15年でCO2排出量がピークで、2050年に90年比の8割削減が地球に必須」と。(資料:各新聞や気候ネットワーク集会で)

【IUCN、マレーグマ絶滅の危機と警告】

「マレーグマ絶滅の危機」とIUCN(国際自然保護連合)が警告。過去30年に森林破壊、密漁で30%以上減り、絶滅の危機を防げと報告。(朝日新聞・11月15日)

【43回ITTC、08-09年事業計画など策定】

11月5-10日のITTC(国際熱帯木材機関)理事会は、次回大会がほぼ決まっているのに、理事会終盤に次回大会開催の立候補で、おおもめ。予定通りアフリカのガーナに決定。今回08-14年までのITTC行動計画の決議が出来ず、1)08-09年の事業計画、2)加盟国の違法伐採対策・持続可能な森林経営などに関する森林法の執行強化、3)温暖化防止への協力等のみが採択。(ITTC参加による)

【大豆の開発、アマゾンの森林破壊の進行】

ブラジル、アマゾンで原生林破壊しての大豆栽培が進み、生産量が6千万トンと10年で2倍以上に。食料の他、EUや中国、日本が家畜飼料として消費。アマゾンで大豆ハイウエーも原生林を壊し、マツグロソ州からアマゾン川へ建設。ブラジル、ペルー共同でアマゾンから太平洋への道路建設も進行中。

(資料:朝日新聞10/28、農業情報等)

朝日新聞「地球異変」取材同行記

神戸大学 発達科学部

中村 彩乃

■はじめに

昨年9月、朝日新聞に連載された、環境問題に関するルポである「地球異変」のインドネシア編の取材に、現地コーディネーターとして同行する機会を得た。インドネシア編では、大量の二酸化炭素を排出する泥炭火災の問題を中心に取材を進めていくことになった。我々はまず、中部カリマンタン州の州都であるパランカラヤに飛んだ。

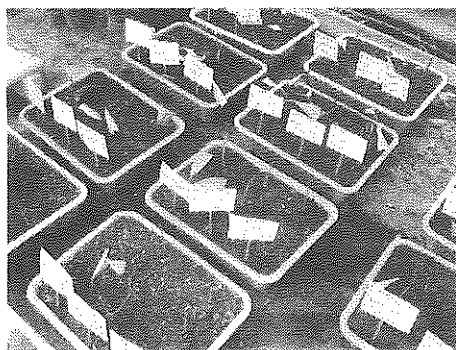
■泥炭火災を防ぐための取り組み

パランカラヤの街に入って最初に目に付いたのが、あちらこちらに掲げられた、焼畑や森林火災に対して警告を促す標語の数々であった。同じカリマンタンの街でも、西カリマンタンのポンティアナックでは全く見かけない。泥炭地が多い中央カリマンタンでは、火災に対する警戒感が強いためである。

泥炭火災を防ぐ取り組みを行っ

ている中部カリマンタンピートランドプロジェクトによると、実際に熱帯地域における泥炭地の6割がインドネシアにあり、その広さは2700万ヘクタールに及ぶ。その約4割にあたる680万ヘクタールは中央カリマンタンに集中している。そのため、泥炭火災を防ぐための多くのプロジェクトが実施されている。例えば、中部カリマンタンにあるパランカラヤ大学や、ウェットランドインターナショナルなどのNGOは、共同で中央カリマンタンピートランドプロジェクトを行っている。このプロジェクトでは、衛星画像を利用した火災の監視や、地元住民による消防団活動などが行われている。

我々も、スハルト政権が進めた農地開発であるメガ・ライス・プ



▲ ピートランドプロジェクトでは ラミンなどの植林も行われている。

プロジェクトの跡地などを見学した。メガ・ライス・プロジェクトは、1995年に始まった泥炭地開発巨大プロジェクトであり、100万ヘクタールの泥炭地を農地に転換し、人口増加が著しいジャワ島から移住民を受け入れようとするものであった。跡地には、広々とした大地が広がり、釣竿をたらす人の姿があるだけであった。辺りには、木々はほとんど無く、やけに立派な高架の道が跡地を貫いているのが見られた。泥炭火災が多発している

場所と聞いていたが、プロジェクトの成果なのか、最近、火事が起こった形跡はなかった。しかし、このことは泥炭火災取材するためにやってきた我々にとってはあまり喜ぶことのできない事態であった。「地球異変」は、写真を中心に環境問題を伝えるシリーズである。泥炭火災の問題を取り上げるインドネシア編では、是非とも泥炭火災の写真を使いたい。その日から、我々は泥炭火災の現場を求め、インドネシアを転々と移動する日々が始まった。



▲メガ・ライス・プロジェクト跡地

■火の手を求めるが、、

ジャカルタに戻った私たちは、早速インターネットの衛星写真を見ながら、ホットスポット探しを始めた。例年、乾季には野焼きが行われ、その煙は周辺国にまで及んでいたが、去年は違った。乾季のはずが、雨が降り続けている。私が滞在していた西カリマンタン州のポンティアナックでも、8月になってもほぼ毎日雨が続き、例年乾季になると街を覆う霧のような野焼きの灰は全くみられなかった。そのような状況の中で、我々は比較的ホットスポットが多く見られたスマトラのリアウ州に向かうことになった。リアウ州の首都であるプカンバル行きのチケットを手配し、久々のジャカルタでゆっくり過ごしていたその夜、街が大き

く揺れるのを感じた。地震である。我々は、ジャカルタ支局に集まり、地震の情報を集めることになった。スマトラのブンクル州周辺に地震の被害が集中しているとのことであった。

翌朝、我々が乗った飛行機は、スマトラに向けて出発した。ただ、行き先はプカンバルではなく、ブンクルであった。泥炭火災取材は急遽、地震の被災地取材に変更されたのである。

■再び火の手を求めて、、、

ブンクルは、州都と思えぬほど、小さな街であった。街では、数時間毎に大きな余震が起こっていたが、建物への被害は少なかった。だが、海沿いを北に向かうにつれて、建物の被害は大きくなっていくのが分かった。死傷者が少なかったこともあり、結局ここでの取材は1日で終了した。我々は、翌日再びジャカルタに戻ることにした。

ジャカルタに戻った我々は、再びホットスポット探しを始めた。どうも、リアウよりも西カリマン

タンが燃えているようだ。我々は、すぐにポンティアナックに飛んだ。

ポンティアナックに着いた我々は、実際に野焼きをしている現場を探し始めた。いくつか、現場を見ることができたが、火災の規模が小さく、写真としてのインパクトに欠けてしまう。この頃から我々は、本当はあってはならない大規模な泥炭火災を求めるようになっていった。

■再び中部カリマンタンへ

西カリマンタンでは、思うような写真が撮れなかったこともあり、我々は中部カリマンタンのパンカランプンに移動した。そこで、野焼きを予定している農民を探すことにした。農民から野焼きの予定を聞き、その日に合わせて撮影をすることにした。だが、ここで現地ガイドの一人から批判の声が上がった。それは、火災を促すことになるのではないだろうか。その通りであった。我々は、インパクトのある写真を求めるあまり、やってはいけないラインを超えようとしていたのだ。そこで、泥炭

火災の取材は後に回し、他の取材を先に進めることにした。だが、取材を終えた帰り道、あちらこちらに野焼きの煙がたっているのが見えた。パンカランプンは晴天が続いていた。農民たちは待ちに待った乾季の到来とともに、畑に火を放ちはじめたのである。

■生きるための焼畑

野焼きの煙を目指して進むと、広大な畑に囲まれた小さな集落にたどり着いた。周辺の畑からは黒煙が立ち上がり、その煙は空高く伸びている。集落に住む人々は、快く我々を迎え入れてくれた。彼らは、先住民のダヤックであるという。

「先祖の代から我々は乾季になると畑に火を入れてきた。焼畑をすると収穫量は全然違う。生きるために畑を焼いている」

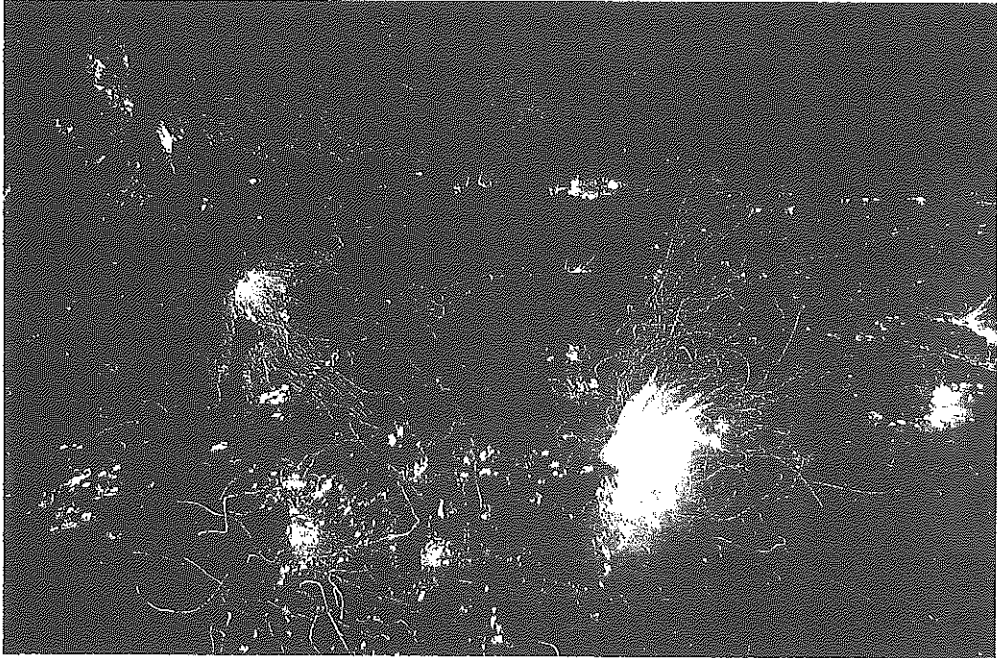
泥炭火災は、大量の二酸化炭素を排出する。火災は止めなければならない。だが、火災の一因である野焼きが行われる背景には、人々の暮らしがあり、生きていくためには焼かざるを得ないという現状



▲ 焼畑によってくぶる大地

がある。実際に、パラカラヤでは、焼き畑禁止に抗議する農民たちのデモが行われたという。人々の生活を無視した政策は実施されるべきではないだろう。住民が、焼畑に頼らずに生活できるような技術やシステムが早急に求められる。

畑に行ってみた。静かな夕暮れの中、パチパチと燃える音だけが聞こえる。地面から何本も煙が立ち、あちらこちらに真っ赤な炎が見える。沈下した土のせいで、木の根が地上に現れている。気が付けば、何時間も静かにこの光景を見つめていた。そして、この風景が、「地球異変」インドネシア編の第一回目を飾ったのである。



森の木々が焼け落ちた後も燃え続ける泥炭地＝インドネシア・中部カリマンタン州で、小林裕幸撮影（30秒間露光）

Oct. 7, 07 A(M)

インドネシア 泥炭火災多発

CO₂噴出

日本上回る年間20億トン

地球 異変

インドネシアで森林火災が多発し、大地に堆積していた泥炭が広範囲にわたって燃えている。熱帯の泥炭は湿地に守られていたが、近年、農地開発などで乾燥が進み、焼き畑の火が延焼するようになった。この火災で出る二酸化炭素（CO₂）は、日本での総排出量を上回るほどの量にのぼる。地球温暖化にも大きな影響を与えかねず、国際社会の対応が必要な事態になってきている。

80年代ごろから、焼き畑や農地を広げるために放たれた火が延焼し、火災が相次ぐようになった。カリマンタンの火災現場に入ると、木々だけでなく、地面から数十センチの深さまで泥炭がえぐれるように焼失していた。専門家によると、自然界が数千年かけて蓄えた炭素が一度の火災で放たれた計算になるといふ。日が暮れても、地面はくすぶり続けた。

国際湿地保全連合（本部・オランダ）が昨年末に公表した報告書によると、インドネシアの泥炭地から大気中に放出されるCO₂は年平均20億トン。日本の排出量は3億トンを上回り、全世界で化石燃料の消費に伴って排出される量の8%に相当する。

12月にインドネシアのパリ島で開かれる国連の気候変動枠組み条約第13回締約国会議（COP13）では、「ポスト京都」の温暖化対策の枠組み論議とともに、泥炭地を含む森林減少をどう食い止めるかが重要な議題になる見通しだ。

（バンカララン・ヘインドネシア・カリマンタン）
（須藤大輔）

アブラヤシの果実がついた大きな房をかき集める。この後、工場内で果
実から油が搾り取られる



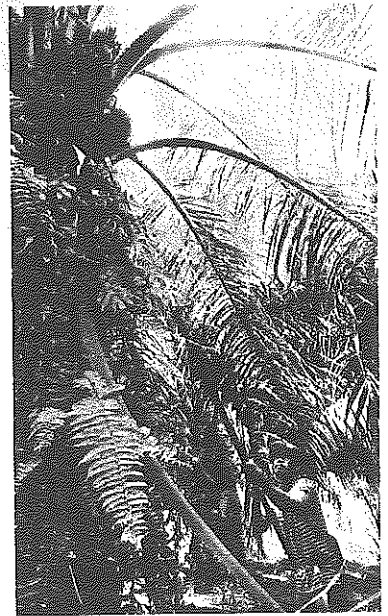
アブラヤシの島
ボルネオ
熱帯雨林はいま

足下に転がる不思議な物体を、けたたましい音を立てながらアルドゥサーがかき集める。サッカーボールよりも大きい。よく見ると、オレンジ色の小さな果実が無数にくっついてい
る。アブラヤシの実だ。
赤道直下のボルネオ島。北東部に位置するマレーシア・サバ

野も丘も「金のなる木」

まさしく「金のなる木」。しかしかつて、ここには熱帯雨林がどこまでも広がっていた。

州では、アブラヤシのプランテーション（農場）が隆盛を迎えている。果実からはパーム油、種子からはパーム核油が採れる。健康に良いうえ、洗剤などに利用した場合、自然界での分解が速いため環境にも優しいとされ、需要は増加傾向。野も丘も、たった一種類の植物でびっしりと覆われている。
「パーム油は食用にもなれば、燃料にも使えるんです」。サバ州南部でプランテーションを管理するマイケル・チョクさん(33)もほおをゆるめる。「アブラヤシの未来は明るいですよ」



プランテーション内で作業をする男性。アブラヤシは男性にとってもマレーシアにとっても貴重な収入源となっている

産経 07.10.15



…オランウータンに森を返せるのは、いつの日…



遅れ、ぼせ、ながら

ポルネオ島 植林エコツアー下見旅 ひらりん 同行記

◆ ツアー期間：2007.07.16～07.22 ◆



んえっ〜ほいっ〜ん
じょうやくいを踊らる
のちやいます!

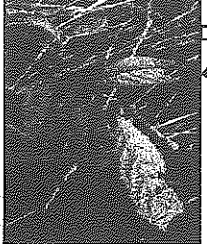
熱帯雨林にワリンの
苗を植えて(茶して)
るんてあ。大きば〜れ!



ママ、ボクタキが住
める森になるまで、
どの位かかるの〜?

未来の
美に☆

↑ お母さんの左腕の脇にも、赤ちゃんがいる



ワリンの苗

〜ポルネオ島のおさらい〜

ポルネオ島は、世界で3番目に大きい島で、日本の面積の約2倍。インドネシア・マレーシア・ブルネイの3国が統治する。かつて島の半分を占めた“ブルネイ”(英語読み)がなまり、ポルネオになったといわれる。インドネシア語では、カリマンタンと呼ぶ。ポルネオも含む熱帯雨林帯は、かつて世界の陸地の14%あったが20世紀以降、急速に失われ、現在6%にまで減少している! 大気中の酸素の40%を供給しているとも言われ、500万~1000万種にのぼる地球上生物種の半分以上が棲息し、その中でもインドネシアには世界のほ乳類の12%が棲息している。そして野生動物の輸入大国である日本の輸入量の15%が、インドネシア出身なのだ。ポルネオの森林の衰さは、世界最大級の樹木多様性をもっていること。例えば、樹木の1ha当りの種数:日本の照葉樹林で約40種、ポルネオ低地林では約300種というデータも。(調査地により違いがある) …… そう、熱帯雨林は、地球を守る屋根なんやね! ……



◆ インドネシア事情 ◆

さて、私達一行が関西空港を11時にガルーダ航空で出発し(バリ経由)、ジャカルタに着いたのは、現地時間で18時をまわっていたと思う。予定到着時刻より遅れたが、機内食がおいしく、スッチーも美人!、遅れは気にならない。しかし、2日後、カリマンタンへ渡るはずが…?! そう予定では、18日の朝ジャカルタを乗ちセマランへ移動し、カルスター航空に乗り換えて、15時にはカリマンタンのパンカランプンに、着るはずだった。。ところが、18日ジャカルタで乗る予定の便がなぜか欠航!(乾期の終わり頃に発生しやすいヘイズ=濃煙や森林火災による薄煙=に因るものではない)しかし、時間に余裕をもって飛行機を押さえていてくれる。なので、次の便でも余裕のはず!(…これが、日本なら!…)

<再び>ところが、次の便のフライトが遅れた！でも、乗り継ぎには、急げば間に合うはずー。
 <三度目の>ところが、乗り継ぎのカルスターは予定より15分早く離陸し、私達が息せききって
 かけつけた時、受付カウンターはガラーン...どうなってるのぉ！オーマイガッド！
 ここは、インドネシア！国が変われば、事情も変わる。乗り継ぎで航空会社が変わるなら、
 ジャカルタで予定のガルーダ航空が欠便になった段階で、次の乗り継ぎに支障がないか、
 確認する事がベストだったのだ。すったもんだした挙句、私達はガルーダ航空会社が用意した
 ホテルに宿泊し、朝から空港でキャンセル待ち。全員がカリマンタンに遅れたのは、20日だった！



〈郷土色豊かな空港〉
 パンカララン(カリマンタン)→
 ←ジャカルタ ↓セマラン

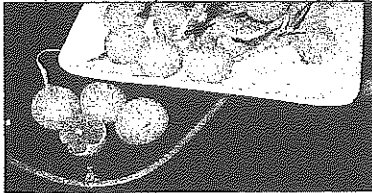


▲開放的で明るく居心地
 良い。広々、午入れの行き届い
 た。中庭が美しい。野鳥も！

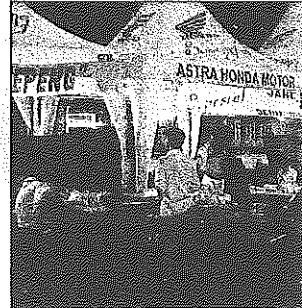
伝統的の建築。地域外生を
 大切している。...日本の空港は
 つまらんやえ...

...しかしながら、そのお陰で？！セマランの屋台料理に
 舌鼓を打ち（何が原因かーかき氷？体調？一お腹を壊すアクシデントはありましたが）、
 スーパーで買い物したりと、インドネシアの生活を垣間見る事ができたのであります。

▼ライチの美味はクレメン

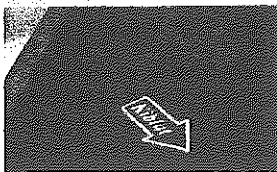


▲蒸しレポイナツツ(カチャルポス)
 45分ほどアツツも。
 ▼物価は格安▼



▲カマロ(ワロン)が立って遊ぶ。

道路の横断、車に注意！歩行者用の信号はないのぉ？！

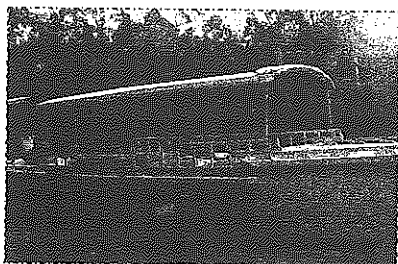


▲皆、スルスと走行中の車の間をぬって
 道路を渡ってゆく。私らには命がや？！
 ▲ホテルの部屋はどこかに「ヤア」がある矢印。
 して、これ、ほかに？ あれもある方向を示す。
 ※ホテルの朝食は、バインゴと、満点です。



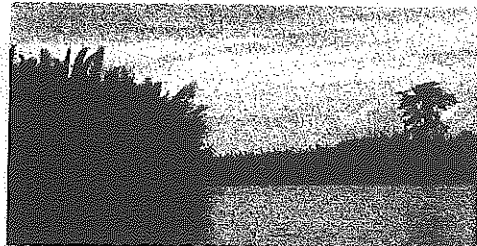
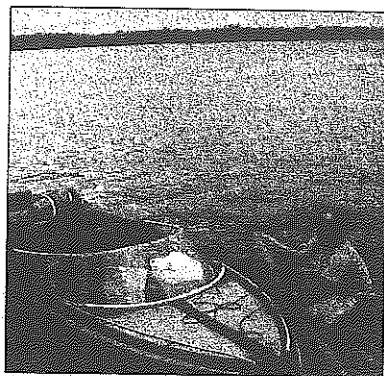
▲朝、薄暗い内から
 コーヒーの
 香り

◆ お待たせしました！いよいよ、カリマンタンに上陸！（ここまでが長かったアー）◆
 パンカラランの空港から、タクシーでクマイの町へ移動。水を買って飲み、スピードポートで
 クルーズしながら、いざタンジュン・プティン国立公園へ！国立公園へは、地元のガイドさん
 づきで入ります。自然の事だけでなく、自然と向き合うマナーも学べます。人間の方が、
 多くの野生動物の生活圏におじゃまするって気持ちを忘れちゃいけないって思います。
 ニッパヤシの群落を両岸に見ながら、どンドン河を上る。途中ガイドさんが目ざとく草むらで
 お昼寝中(もう夕方でしたが)のワニ(2頭のワニ)を発見！ここは、ジャングルなんだ！



←本来乗る予定だった船
(クロット)
ユックさんついで

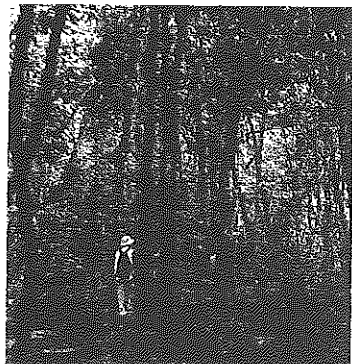
宿泊しながら
クルーズできる。
今回は急ぎょスピード
ボートに変更! →



←ニッパヤシの
群落

ブンブンとスピードボートは、セマランでロスした
時間を取り戻すが如く川面を走り、頭上を白頭ワシや
ホールビルが横切ります。

ーそして船着き場から国立公園の森へー



森は想像したようなうっそうと繁ったジャングルではなく、明るい
二次林らしき細い樹木が多かった。突然、ウオッホ ウフォー
と声がする!一瞬、私の後ろを歩くリーダーがふざけてる?
と思ったけど、違う!...茶色い塊が動くよ、オランウータンだ!
本物~うわあ、ワクワク! そうこうしていると先頭と距離が開き、
先頭のガイドさんに呼ばれ、慌て追いつく。。カトカトカトカト。。
密猟・森林火災や伐採・開発等で生息地を奪われ、保護された
オランウータンを、自力で暮らせる様にリハビリ(訓練)した後、
帰す場所が、この森なのだ。

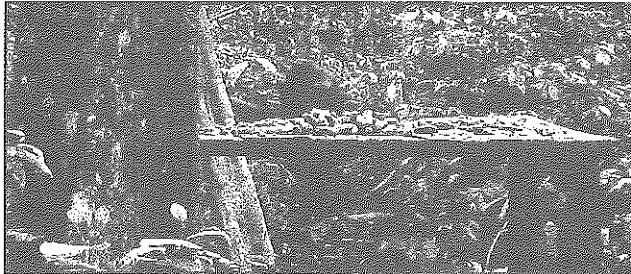
→国立公園内オランウータンファンデーション
インフォメーションセンターの壁画はやはり
オランウータンだ!



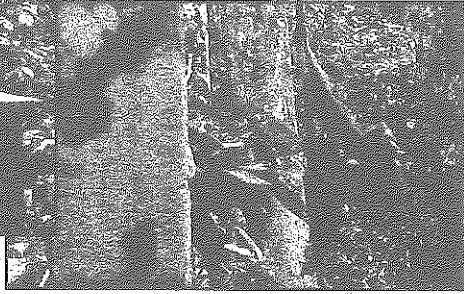
↑センター内のホールビル
(BRACK HORBILL) の剥製展示。

👁️ オランウータンは、アジア最大の樹上生活者。大型類人猿で、人と遺伝子がナント97%
同じで(因みにチンパンジーは98%)、普通単独行動だが、子供は5、6才位まで母親と
暮らす為、母子と兄弟が一緒の事も。夜は、木の樹冠部に枝を並べて葉つき枝を部分的に
纏んだベッドを5~10分で作る。私もそこで寝てみた~い! かつては、ボルネオ島、
全島に分布してたと考えられるオランウータンは、棲息地の消失で今ではサバ・サラワク
(マレーシア)・カリマンタン・スマトラの人手の入っていない熱帯雨林に僅かに分布する
絶滅危Ⅱ種になってしまった。。動物たちは、植物の果実をただ食べているだけではない。
食後の移動先で未消化の種子を排泄することで(肥料付きだ!), 植林をしてるんです。
人間が木を切りっぱなしにしてたら、恥ずかしいヨネ。

さて、さらに森の中を進むと、少し開けた所に何人かの外国のツアー客が集まっていた。
森の中に大きな食卓?! オランウータンの為の食卓です。つまり、餌台(観光の目玉?)だ。
森へ帰されても、食べ物が不足した場合に備え、フルーツ等の食料が置かれている。
栄養のバランスを取る為、サプリメントも置かれているのには、ちょっと驚きだった。
それにしても、この場所は絶好の観察場所だ。ちゃっかり、リスもご利用客だ。



餌台にきた親子 ↓

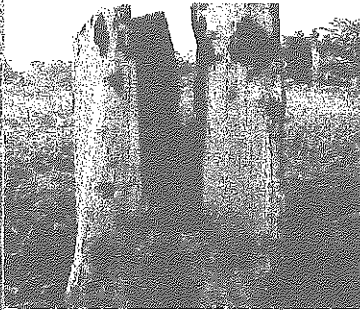


↑ 餌台で、ほほに脂肪のヒラヒラ(エラ)が付いた
大きめのオスがお食事中

◆ 地球の屋根を修理=植林しよう! ◆



↑ 木道のトレイルを通過して、
タンジュンハラバンで植林



↑ '97、'98、'06年に起きた森林
火災地で、焼けた樹から新芽が!
森も再生をかけて、頑張ってる。



↑ ウリンの苗木



← 手前の木は3、4年位前に植えたもの。

苗木は4m間隔で植えます。

赤道直下は、日暮れが早い。あっという間の
ボルネオの1日。薄暗い木道を虫の声を聞きながら、
ポートへ戻り、今夜の宿、リンパロッジへ。
ここも湿地帯の森の中。環境に配慮した木道を
歩いていくと、雰囲気のある木道のロッジが現れる。
部屋のベッドにはかやがつかれ、蚊取り線香も常備。
シャワーはお水だが、これもエコです。何より・・・
満天の星空だ! 堂に、カニクイザルのおやすみの声!

◆ 帰る日が。。 ◆

21日朝5時半、朝日に輝く河を再びクルーズだ。カワセミにアカショウビン、野鳥の空庫。
長い鼻がぶらぶらじゃまそうに見えるテングザルは、ボルネオの固有種だ。立派な鼻のオスに
数頭のメスが1群となり、若い葉っぱで朝のお食事中だ。オランウータンの保護センターには、
もう野生に戻れないのだろうか、立派な体格のオランウータンが何頭か姿をみせていた。
野生では地上に降りる事は殆どない樹上生活者が、道端に塵り込んで。その背中が何か
言いたそうに見えた。ポートで川を下り、私達が森を離れる時、野生のオランウータンが現れた!
時間がかかっても諦めちゃいけない。そう、最初から欲張ろうとせずに、1回1回よりよい
ツアーの形を探ればよいと思う。参加した人達が作っていくエコツアーがあっても面白い。
そして、より多くの人に地球の現実を知って行動してほしいし、何より森を守る事で地元の人達が、
経済的に潤う持続可能型エコツアーが実現したらいいな。貴重な体験でした。感謝!パオ

※ 初めは、森でヒルに吸血されたのも貴重な体験!

参考文献 : 「オランウータンに森を返す日」川端裕人・「熱帯雨林の動物たち」安間繁樹・
「熱帯雨林を観る」百瀬邦泰・「BORNEO」水越武・webからもデータ引用・wikipedia

HUTAN ACTION SCHEDULE



'08年度ウータン総会

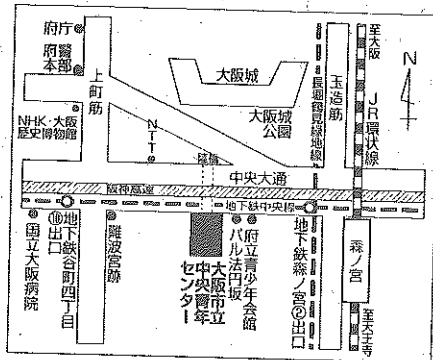
【時】2/16(土) 午後1時半～
 ・今年度の活動方針
 報告など色々……。

【場】大阪市中央青年センター (Tel) 06-6943-5021

交通

- JR環状線 森ノ宮 西へ徒歩10分 600m
- 地下鉄 長堀鶴見緑地線・中央線
 森ノ宮 ②出口 西へ徒歩8分 500m
- 地下鉄 谷町線・中央線
 谷町4丁目 ①出口 東へ徒歩8分 500m

中央青年センター




INFORMATION

〈会費、カンパを頂いた方々〉 (2007年9月21日～2007年12月8日)

(敬称略)

栗岡理子 橋本征二 細川弘明 望月敏子 山内美登利 山田光一 由良行基 蓮原耕児
 和田善行

(ありがとうございました)



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
 サクラビル新館308
 「関西市民連合」気付
 (HP) www.005.uyp.so-net.ne.jp/hutan/ Tel.06-6372-1561

【一部】300円 【年会費】4000円
 【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
 ◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。